再ひ王制作者に就て

稻葉岩吉

本誌前號紙上、瀧本博士は、余がかつて、魏了翁の王制を以て、漢の孝文時代の作なりとせるは、盧植の說に基つけるものなるをいひ、併に盧の說は、史記の封禪書に出てたるべしとの想像を述へたるに對し、余が何故に了翁が史記に依らすして、盧說に基くとせるや、盧には三禮解話及ひ盧植集あり、その何れの書により て、斯く認めしやと反問せられたり。

余にとりて、かゝる反問に答へんことは、寧ろ當惑に値すと謂ふべし。何とならは、余は、但た博士が、かつて玉制に關する疑義をその經

濟漫錄に揭けられしより、かたがた所見を述べしまてのものにて、余の責任は十分なりと思惟すれはなり。然とも折角の垂問なれは、再ひ管見を開陳すべし。

余は、博士の御質問なる盧植の二書は、遺憾ながら共に知見せず。隋書の經籍志は、盧の著述として禮記十卷（漢北中郎將盧植注）と稱するもの、及ひ、盧植集二卷を揭けあれとも、後者は、文銅の梁代まて傳來して、而も隋に亡ひたるよしを明記せり、古書の佚文蒐集に堪能なる淸人にすらも、本集は未だ捃摭せられさりしこと、思ふ。博士が、かゝる性質の下にあるものを取り來りて、余に求めらるゝことは、寧ろ當惑の一なり、博士は又た盧に三禮解話の著ありといふ、寡聞之を知らず、浙江丁氏の藏書目には、本書は明人の著述として錄されあり。隋書著錄の禮記十卷は、如何といふに、舊唐書藝文志既に之を收めされは、これ將た世に完書なかるべく、僅に淸代玉函本の輯佚あるにすきず、禮記盧氏注なるもの卽ちこれなり。然とも玉函本が、果たして、盧植の面目の幾部分を蒐收し得たるべきや、これ又た余をして判斷に苦ましむ、これ當惑の二なり。こゝに於て余は遺憾なから、博士の要求に應する能はさるを提言せん。

余の、魏了翁が、史記によらすして、盧說によれりとすることは、全然想像なり、然とも亦自ら因由なきにあらず。了翁は、知らるゝ如き儒林傳中の碩學にして、禮經に關する著書多き人なり。余は、こゝに於てか以らく、了翁の王制に關する所見は、史記の所載を直接に採れりといふよりは、禮記注疏（漢鄭氏注、唐孔穎達疏）による盧說を採れりとする方、寧ろ妥當の見解なるべしと。試みに王制第五を見よ、

陸（德明）曰盧云漢文帝令博士諸生作此篇。

正義…盧植云漢孝文皇帝令博士諸生作此王制之書。（十三經注疏）

余の想像は、以上述ふるところの如し、余は、必しも甚しき矛盾を信せさらんとす。然れとも、余は再四繰り返へして言明せし如く、この推定は、全く想像に過きすといふの外なし、何とならは、余は未た鶴山文集等了翁の文字を讀過一番するの機會を得さればなり。博士は、了翁の著書を多く藏せらるゝものゝ如し、この點に關して、更めて余に敎ふるあらは、眞に幸甚なり。